

仙台城址中嶋池跡に関する現況調査*

東北工業大学 正員 松山 正 将**

1: はじめに

仙台城址の国史跡指定は仙台市民の長年の夢でもありましたが、新聞報道によれば(河北新報 2003 年 1 月 18 日付け朝刊)、本丸跡の北面石垣修復工事を契機に行政や市民の活動が加わり、2002 年 5 月に部分指定の内諾を得て、2003 年夏ごろまでには指定を受ける見通しのようである。

仙台城とは大きく本丸と二の丸を総称したもので、本丸は初代仙台藩主伊達政宗が 1600(慶長 5)年から 1610(慶長 15)年にかけて青葉山丘陵東端の山頂付近に築いた城であり、二の丸は二代藩主伊達忠宗が青葉山山麓に太平の世に対応させた居城として、1638(寛永 15)年から翌年にかけて築いた城である。仙台城の立地に際しては軍事的見地ばかりではなく、領内統治や交通の便などの政治的、経済的見地からも検討されたことは当然のことと思われる。しかし、仙台城の最大の特徴はやはり軍事的堅固さである。それは南方の竜ノ口峡谷や東方の広瀬川など自然地形を巧に生かした防備性と、西方に連なる山林一帯(「御裏林」と呼ばれる青葉山丘陵)の湧水群を水源とする水利用の灌漑技術に象徴されるように考えられる。

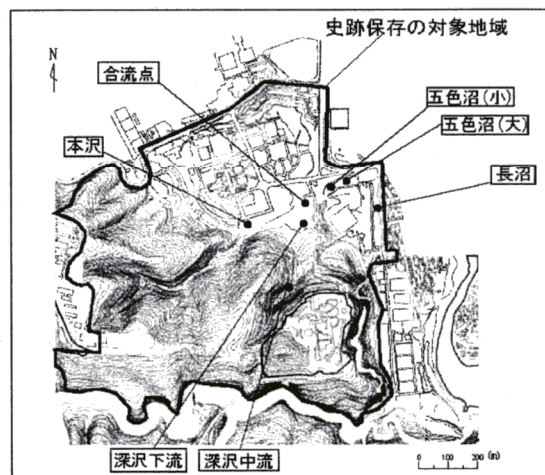
現況調査はこれら仙台城址の特徴となる空間保全に必要な基礎資料作成を目的としており、これまで対象地域の地形と水環境に関する調査結果などを報告している。今回は、本丸と二の丸の中間に設けられていた「中嶋池」復元の可能性について、その後の調査で得られた知見を加えて報告するものである。

2: 対象地域と調査内容

図-1 は現存する仙台城関連絵図の中で、最も古い「奥州仙台城絵図」である。本丸南側の竜ノ口峡谷、東側には大きく蛇行する広瀬川、そして西側には御裏林と呼ばれる青葉山丘陵の大森林が連なっている。また、御裏林からの流水を二の丸中嶋池と裏池に貯留し、余水を排水先の広瀬川まで階段的に配置した侍屋敷などで利用している灌漑技術を見てとれる。

図-2 は、仙台市文化財保護委員会が「仙台城跡の保存、並びに整備活用について」と題して答申した(1988 年 8 月 9 日)史蹟保存対象地域の範囲を示したもので面積はおおよそ東西南北 1km 正方(約 103ha)となっている。図中の黒丸は中嶋池との関わりのある流水路で、流量・pH・水温等の定点観測位置を示している。

調査ではこれら仙台城の特徴となる基本的地形の現況把握を中心に、地形測量と水環境調査を継続している。地形測量ではトータルステーションと図形編集装置を用いたオンライン方式を採用し、地形の細部把握に毎木調査も導入して数値情報化を進めている。水環境調査では、仙台城の水源であった御裏林の流量について、主に中嶋池跡に流入している二つの水系(深沢、本沢)の流量観測を行っている。さらに、御裏林の二つの水系から広瀬川に至る流水路の勾配を、電子レベルを用いて水準測量を行い、対象地域の流出解析資料の充実をはかった。中嶋池の余水先となる三の丸跡(現在の仙台市博物館構内)においても、地形把握と湧水量観測を行い併せて五色沼と長沼の水質分析などを加えている。



3: 調査結果

(1)地形把握について：現在までに作成している地形図を、図-3と図-4に示す。これらの位置情報は全て数値データであるが、御裏林は東北大学大学院理学研究科付属植物園であり、かつ国の天然記念物「青葉山」に指定(1972年)されている事から、測量作業は植生の休眠期間に限られ調査スピードはスローペースとなっている。しかし、これまでの調査では、御裏林の防備性を高めるために設けられていた堀切に関する絵図情報を、現地作業を通して堀切位置とその形状を現況地形図上に確認することができた。また、両水系の流域内湧水箇所、斜面崩壊箇所、昭和初期から1968(昭和43)年まで操業していた亜炭坑口や亜炭ズリ堆積箇所も数箇所ではあるが確認できた。

(2)水環境について：「仙台城御城覚書(1723(享保8)年)」は、「正保仙台城絵図(図-1)」の中の書き込みを写し取ったものと言われている。その記述から中嶋池の規模を確認すると、次のような値となっている。

一、同沢(本沢のこと)末の溜池(中嶋池のこと)、二の丸より巽の方、東西五三間(96.4m)、南北七六間(138.2m)、深さ二間三尺(3.0m)、水落堀幅六間(11.0m)、深さ二間半(4.5m)。

現在裏池跡は埋め立てられて道路や東北大学川内キャンパスの一部として使用されているが、中嶋池跡は1945(昭和20)年9月16日に進駐軍キャンプ地として接收されて、造成時に埋め立てられたままとなっている。しかし、中嶋池の水源であった二つの水系、即ち御裏林の本沢と深沢からの水供給は今も続いており、埋め立て跡には水路が形成され湿地のように葦などが繁茂している。表-1は、この4年間の観測値を年度別平均値(単位はリットル毎分)として表したものである。

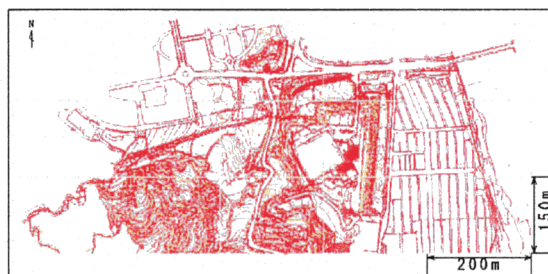
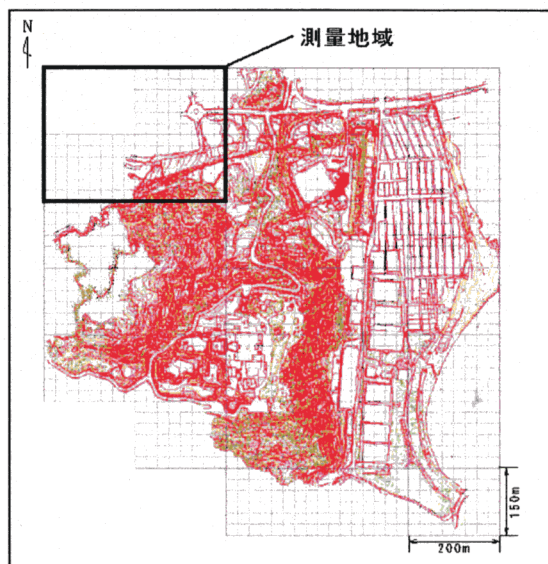
この表の最低値を用いて1日当りの流量を概算すると、深沢で約90 m³/日、本沢で約240 m³/日、合計で約330 m³/日となり、中嶋池復元(貯水量概算は約30,000 m³)に欠かせない流量については確保可能と判断される。図-5は深沢と本沢の沢頭頂部から中嶋池跡、五色沼、長沼、追廻地域を流下して広瀬川に至る流水路の勾配を縦断面図として示したものである。全長はおよそ1986m、標高差119mで平均勾配は6.5%となっているが、中嶋池跡と五色沼との標高差が約9mで29.5%、この区間の流路復元に際しては特段の工夫が必要に思われる。

4: おわりに

国の史跡指定を長引かせていた理由の一つとして、史蹟保存対象地域の土地所有者が複数であり、史蹟申請に関する合意が進んでいなかったことを指摘できる。この間仙台城址の荒廃は、以前にも増して自然的にも人為的にも顕著であった。先には、仙台城本丸石垣修復工事と関連して櫓や大手門等の復元が話題になっていたが、地上の建物の復元もさることながら、仙台城の特徴に配慮すれば残されている自然地形と水環境の保全対策が何より必要に思われる。このような視点で、「中嶋池」復元はその象徴的な事業事例になるものと考えている。

5: 参考及び引用文献

- 1) 仙台市文化財保護委員会、「仙台城の保存、並びに整備・活用について」(答申)、1988年8月9日、10p
- 2) 松山他、「仙台城址御裏林の現況調査について」、土木史研究No.18、1998年6月、pp521~528、3)「仙台城」仙台市編、1967年295p等



	1999年	2000年	2001年	2002年
深沢中流	70	43	54	49
深沢下流	109	63	77	72
本沢	* 193	* 167	* 203	* 195

* 本沢の流量は最上台沢(仮称)の流水の一部を含む

